

アジア・オセアニア共催 BP&PL 大会報告

平成 26 年 12 月 7-14 日

メルボルン、オーストラリア

団長 山口 真人



大選手団団長を務めた山口真人氏

オーストラリア、と言えば…

カンガルー、コアラ、南十字星、グレッグ・ノーマン、ミランダ・カー。

よく映像で見た事がある真夏の海でサーフィンをしているサンタさん。

本当にあった南極が上になっている世界地図。

ちなみにトイレの水を流したら日本にいる時と反対側に渦を巻き…

そんな真逆な地で 12 月 8 日から 14 日まで前代未聞の大会が開催されたのです。

ちなみにお断りですが今回の大会の個々の全ての選手のレポートはあまりに大人数でキリがないので、いずれまた別の機会があればその時に是非。

なので今回はあくまで日本チームとしての総論です。本当はいろんな方々をやたらと褒めちぎってあげたかったんですけど…あしからず。

おいおい、ところでどうなってんだ。

はるばる飛行機に乗って別世界に舞い降りたとたん、なんとなんと「寒い」ではないか。

ほとんど半袖シャツしか持って来てないぞ。

短パンまで持って来てんだからな。(結局、一度も履かなかったな)

聞けば開催地・メルボルンはまだ夏の初め。

それに今年に限っては例年よりその夏の訪れが遅くおまけに雨も多いのだそう。

こいつはまいったな…

そんな事はともかく、そのあまり暑くない夏に歴史あるアジア大会が初めてオセアニア・オーストラリアの地でクラシックで合同開催される。

「一体、どんな大会になるんだろう？」

全く初めての事ばかりなので「日本選手が活躍を見せつけてほしい！」という思いばかりか「オセアニアのとんでもない輩を見てみたい！」など楽しみも多かったが、ともかく今回の大会の参加者が大変な数だ。

全体で参加者 550 名ほど。

日本選手だけでもベンチプレス部門に 38 名、パワーリフティング部門に 24 名。

さらに役員と付き添いなど含めるとざっと 70 名を越える大選手団だ。

いろんな国際大会は数多くあったがたぶん史上最多なのでは。

結果的に開催国のオーストラリア（正式な代表でない B 代表もいたけど）を除けばオセアニアのナウルの 76 名の次に多い選手数。

日本選手の皆さんに参加の動機を聞けば、やはり今回がいつものアジアの単独大会だけでなくオセアニアを含めた合同開催なのが「ひとつ格上」のような感覚で参加された方も多かったようだ。

「ハクがつく」といったところか。

それと開催国がオーストラリア。安全な文明国という安心感もあったのだそう。

ところがそもそもオーストラリアへの渡航は季節的にピーク。

確かに成田空港にはもう楽しくて仕方がないのだろう、飛行機の離陸を待ちきれない修学旅行生たちの弾ける笑い声で溢れかえっていた。

大会は前半の 2 日間でベンチプレスの試合が行われ、その後にパワーリフティングの試合となる。

それにより旅程が大きくふたつに分れる事になった。

それにも増して 70 名を越える面々ならば個々にそれぞれいろんな事情もある。

ともかくこの大選手団を渡航させる事自体が大変な事業だったわけ。

国内に於いても派遣業務の窓口をされた国際委員会の面々もなにせ数もさることながらいろいろと選考やら連絡等にご苦労されてました。

請け負って頂いた旅行代理店の方々にも大変なご苦労をお掛けしましたね。

皆さんのお力が結集したおかげで今回の大会の参加に至った事を改めて感謝。

さて、団長を仰せつかった小職は「情報収集」の目的で主力部隊より前日入り。早速、会場となっているメルボルン市内のほぼ中心部にあるホテルに直行。

チェックインもそこそこに会場に足を運ぶ。実行メンバーに挨拶。みんな良さそうな笑顔。よしよし。既にトライアルのローカル大会が実施されていた。

レセプションのあるグランドフロアーにウオームアップ会場と検量場所もありそこそこ広い。まあ、いいだろう。

ところがその上の 1 F にあたる試合会場はプラットフォームも含めて「ちょっと狭いな」とも「観客席も設けてあるがここに各国の選手団が来場すれば溢れかえるぞ!」とも…

そんな心配をよそにぞくぞくとオセアニアの島国の選手たちが来場。



町にはクラシック調とド派手なビルが混在

どこにでも座り込むオセアニアの島々の選手



おお、来た来た。

彼らはおそらく普段、オセアニア大会でそんな雰囲気慣れているのか早くも椅子にも座らず会場の床にべったりと腰をおろしリラックスしている。

お国柄なんだろう、ほとんどが裸足だ。

男性はもちろん、失礼だが女性もそれは立派な体格。

何を食べればあんな身体になれるのか？

その間も平気でモノをくちやくちや食べ、ぺちやくちやお喋りを楽しんでいた。

さすが、です。

さて、この辺りでメルボルン便り。

今回の滞在ホテルはさほど高級ではない。とは言え部屋は適度に広くベッドも大きい。しかし、こちらの習慣なのだろう、ほとんどの部屋には湯船が無い。

風呂好きな日本人には長逗留は辛いのかも。

そのホテルの周りは大きなマーケットやスーパー、コ

ンビニもあり買い物は歩ける範囲で済ます事が出来て何の問題もない。

夏なのにクリスマスの飾りつけは日本人にとっては珍しいが、街並みも奇抜なデザインもあれば歴史を感じさせるものまで。緑も豊かで適度に綺麗で過ごしやすそう。トラムの電車もいい味出してます。それにしても色んな人たちがいるなあ。

ただ物価は高い。

そう言えば運の悪い事に出発の直前にググッと豪ドルが高くなったのもあるが、お水のペットボトルが安くても日本円で250円ほどで高いのはなんと500円。コーラなど400円。ビールは安くても800円から1200円。オージービーフの聞こえも良いステーキも3000円くらいからでさほど美味しくもないじゃないか。

そんな大都会のメルボルン。普段、東京で暮らし慣れている小職には夜の10時には飲食店のほとんどが閉まっている健全さにはほとんど困った。

行ってみないと知らない事ばかりで実は「コーヒーの国」でも。

小職は通というほど嗜む方でもないがアイスコーヒーが切れると禁断症状？が発症する。

街のカフェのコーヒーの種類や飲み方の多さに目を見張る。

「何をどう頼んだら良いの？」

そしてどこの飲食店に行ってもまず勧められるのはアサヒスーパードライ。

「辛口」とはっきり漢字が刻まれたグラスを持って来る。

「おいしい、こっちならそっちの国から来てんだぞ！」

今の時期は夏時間なのか夜の9時前まで陽が明るい。

ゆっくりと大陸に沈んでいく夕陽を眺めているとメールで報告が。

日本選手団の主力部隊は無事に旅立ったようだ。

翌日12月7日にレフリー&テクニカルミーティングが実施される予定。

そして日本選手団が到着。

さすがにお疲れか？

さらに名古屋方面から来るはずのメンバーがエンジントラブルで遅延。やむなく寄港地の香港で一泊（と言っても数時間・良いホテルだったらしい）となった。



サモアの女性はみんなデカイ、86kg級でも軽量級？

残り、15秒！早く出ていかないと、タイムアウトだよ！



名古屋組の面々は気の毒な限りだが、こういった事もあるのが国際大会。

折り合いをつけながら？割り切るしかない、のも国際大会。

その夜のテクニカルミーティングに出席。「あれ、ほとんどの国がまだ来てないぞ（或いは出席してない）」

この大会の全貌が掴めたようでもそうでなかったようでも。

アップ会場（ホテル内）での練習は禁止と選手とコーチ以外の出入り禁止。

練習したい場合は歩いて15分くらいのメルボルン大学のジムを開放など。

セコンド（コーチ）の事も取り決めが行ったり来たり？

「何もかもが初めてなんだから細かい事は飲み込もう」

そこから選手の出場スケジュールからいろんな相関関係を辿ってセコンド表を作ってみたものの結局はIPFの規定に乗っ取った形になり、とんだ取り越し苦労を味わう。いやいや、まあ、いい。そうでなければ人で溢れかえっちゃうからね。

日本チームのミーティングも大人数なので結構な時間が掛かります。

お恥ずかしい事に小職も普段はギアと格闘しているので初めての方も多くて。

まあ、縁あってこんな遠いところでお会いしたんですから宜しくお願いします、と個人面談。

ジタバタしても明日から始まってしまいます。

やがて夜中に差し掛かってようやく件の名古屋組が到着。

皆さん、疲労の色が隠せません。無理もないですね。

12月8日よりいよいよベンチプレスの試合が始まる。

まずは女子全員が出場。

12月9日は残りの男子全員。

朝から否応なしにタイムスケジュールどおり進んでいく。

皆さん、ちょっと緊張しますね。

でもどのセッションにも日本人の参加が多いのはそれぞれライバルではあっても何かと心強いはず。

しかし日本人選手が多い。

男子の第1グループには59kgと66kgという組み合わせの都合もありましたが、なんと9名も出場。ほとんど全日本ベンチプレス大会？

試合ではみんなが協力し合って、和気あいあいと進行



セコンドも一体誰がどの担当なのか？

試合はそれぞれのドラマがあり嬉しかったり悔しかったり。

「これを挙げれば…」

そんな場面にいくら出くわしたけど、それを掴むか否かで歓喜か落胆かのせめぎ合いを今回も見ました。

あっと言う間にアジア&オセアニアクラシックのベンチプレスの試合は終わってしまった。残念ながらベンチ組は一部のメンバーを除けば翌日の深夜に帰国の途に付く。バンケットの開催はパワーリフティングが終了した最終日なので、こんな機会も無いからと「ステーキの会」を銘打って親睦会をと。

そこで運営のオーストラリア協会に「良い店はないかい？」と聞き込み。

さらにそこから「ならば俺たち（私たち）も一緒に行く」となった。

あれ、ベンチは確かに終わったけどもうパワーは始まっているんだけど？

それでも積極的に我々を街中に引率してくれました。

今大会の主催ディレクターであるロバート・ウルクスさんや豪連盟の面々。

アジア協会の吉田ご夫妻にも出席して頂き、今回アジア連盟に新規加入したシンガポール協会のメンバーも。

これぞ国際大会。

お店は…まあまあだったけど楽しかったなあ。

こんなこともあるんだな、と嬉しく思った夜でした。

そしてその夜は「門限なし」（もともと無かったけど）

しかし、さして誰も武勇伝を残す事もなかったようで。

次の日も日中いっぱい市内観光などで割と楽しんだ小市民たち。

深夜に東京&名古屋組が。早朝に関西組が。

見送るとなんだかちょっぴりセンチメンタル。

ベンチプレス部門では男女ともにベストリフターは日本選手。

男子は鈴木祐輔選手。

その圧倒的なパワーを見せつけオセアニアの連中からも羨望の眼差しを浴びた。

鈴木選手は自身の試技の意識の高さもさることながらベンチ組のリーダーとして他の選手にも気を配り大いに貢献してくれた。

女子は古屋典子選手。

ステディな試合運びで他を圧倒。古屋選手は翌日のパワーにも出場。鉄人ぶりも。

その「ステーキの会」が催されメンバーがたいそう上機嫌だった頃、既にパワーリフティングの試合は始まったのです。

**日本選手有志とオーストラリア
役員とでステーキを食べに行く。**



既報の古屋選手がまたまたステディな試合運びで成功試技を重ねベンチ部門で前日のシングルベンチの記録をも塗り替える健闘ぶり。

古屋選手とセコンドの鍵谷さんには事前にお断りしてましたが応援できなく申し訳ありませんでしたが、さすがです。

そして前日にパワーリフティングチームも合流し一時的ではあるけど日本選手の大選手団がここメルボルンに一堂に会し、その姿や壮観。

特にオセアニア勢にとっては日本選手のベンチプレスのスキルの高さは斬新な驚きだった模様。

本来はベンチプレスが全くお粗末な小職にも「フォームを教えてください」と懇願。

そりゃ、まあ偉そうに教えましたけど。

そして本格的に 12 月 10 日よりパワーリフティングの試合の火蓋が切られる。

さすがにベンチプレスで席卷した日本選手たちでしたがマスターズのお歴々はさすがにお元気ですが重量級になるにつれ、いよいよオセアニア勢が実力を発揮。

クラシックというのもあって中にはフォームなんてどうでもいい、という力こそ全ての輩たちも多くいてともかく地力が凄まじい。

スクワットなんかはもうグチャッって音がするくらい勢いよく下がって背中が丸くなろうが膝が前に出ようがお構いなし。

さらにギアがほとんど主戦場の小職がハラハラしちゃったのは特にナウルやサモアなど島から来ている選手のほとんどがコール（バーズローデッドの）されてからヨッコイショと控えの席から立ち、ゆっくりと歩き出し、それからコーチがわめき散らし、その間もまだ耳にヘッドフォンだったり、それから滑り止めチョークをゆっくり…テクニカルコントローラーに促されたり怒鳴られたり（本当はそれも過剰サービス？）やっとプラットフォームに現れたかと思うと残り 10 秒くらい。

もう心臓に悪いよ！ちゃんと早めに準備しないとダメだぞ！

そんな中でも同じアジアの仲間でもある特にインドネシア勢のデッドリフトのスキルの高さは会場を感嘆の渦に巻き込む。

それほど素晴らしく美しい試技ばかり。

もちろん本来は日本選手のセコンドなのだが普段からアジア大会では顔馴染みなのもあってか Doni 選手がデッドリフトの時に「セコンドをして背中を叩いて気合を入れて欲しい」と言って来てくれた。

断る理由など何もない、むしろ大歓迎だ。

きっと小職の成績こそ大したことはなくとも気合だけではアジアを席卷している姿を認めてくれているんだ、と嬉しく思ったものです。長くもやるもんですね。

さらに目の前で世界記録を達成した姿はアジアの連帯感を味わえて震えたと興奮した。自分が世界記録を叩き出した気分浸れた。次は日本選手の番だよ！



常に堅実な試技をする古屋選手

一気に終わってしまったベンチプレスとは違い種目の多さからもセコンドのサポートが特に必要なパワーリフティング競技。特に今回は二宮正晴選手と武田裕介選手には自身の試合の前にも関わらず日本パワーチームの為にリーダーとして辛苦を惜しんで尽くしてくれました。

二宮選手は日本選手では最後のパフォーマンスだったので小職もがつつりセコンドをやらせて貰いましたが痛む膝を抱えながら精神力の強さを見せてくれました。

武田選手は重量級で国際大会の頂点に立つという快挙。

あまりに多い選手数からか時間的な配慮からかセッションの最後に行われるオープンのみが直後に「ちゃんと」表彰される事になっていたので武田選手のおかげで「君が代」が聞けました。

頼りない団長にコキ使われて自身の試合では本当は思う存分出来なかつたかも、と察するに申し訳なく思うとともに。

今大会はレフリーとして大森了、大森聖子、物江毅（敬称略）の3名が参加。

共に日本のジャッジの技術の高さを披露して頂きました。

物江毅審判員は主審をされる時に誰より大きくハッキリした声でコールをしてくれました。

大森了審判員はどの国のジャッジからも親しく声を掛けられていましたし、大森聖子審判員が一番最後の最重量級のセッションの主審を務められ荒ぶる猛者たちにも臆することなく毅然とジャッジを敢行しておられました。

国際大会に「日本は審判員を出さない」といつも何処かの国からお小言を言われてましたので今回は大いに溜飲が下がった思いです。

今回の大会で目に付いたのは「ギアチェック」です。

本来はIPFのルールに於いてもクラシックでは「コスチュームチェックはしない」と掲げてある。

ただしテクニカルコントローラーが目を光らせますよ！と事前にメンバーには警鐘を鳴らしていた、が。

ほとんどのセッションで「ギアチェック」が執り行われた。

一般論かも知れませんがいわゆるギアの試合では必ずコスチュームチェックは行われるのでギアに対する「これはセーフ、これはアウト」の意識は高い場合が多い。

ところがクラシック（ノーギア）では今までギアチェックは行われていなかったのと、失礼ながら国内では「フাজー」な事もあって今回の大会でもIPFに於いて禁止されているアイテムを持ち込んでいるメンバーが何名かいた。

「あれだけ言ったのに…」

ちなみにコスチュームチェックで引っかかった例としては「アディダスやナイキなどのメーカーロゴ（縦2cm以上、横10cm以上）」でガムテープを貼られる。

男子の（女子は見てませんので知りませんが）アンダーウェア（パンツ）は途中からうるさく言われ出し、ちゃんと画像まで掲げる始末。ゆるパンはダメです！

あとはIPFのアプルーブを取ってないもので運よくギアチェックを通過しても小職が気付いたものはそれを使って試合に出る事を止めてもらいました。

そもそも「ノーギアのギア」っていうのもややこしい話。

でもレギュレーションで許されているのだからこれもルール。

実際に会場にブースを出していたIPFの公式サプライヤーのSBD社の商品はなんと日本選手が大量に買い占めていった為にパワーが始まる頃には品切れ状態に。

それに対抗して老舗のタイタン社もアイテムを揃えてくる模様だ。

めまぐるしく変化していく流れはこういった国際大会に出ていないと掴めないものかも知れませんね。

年が変わって今年2015年の12月、今度は西アジア地域のウズベキスタン。

当初は「遠い」との理由で難色を示していたオセアニア連盟も軟化し今度もアジア&オセアニアの合同で開催予定。

場所柄、今回は不参加だったのがちょっぴり寂しかったイランとかカザフスタンなどのメインメンバーがゴロゴロ出て来るかと思うと楽しみです。

またそこで日本選手が活躍してくれるのを切に願うばかり。

今回の大会で小職があらためて強く感じたのは選手が醸し出す「雰囲気」

いろんな選手がいます。

言い換えれば「惹きつけられる選手」

個性的な選手はいる。

原吉則選手はオセアニアの会場の皆を驚かせる超ナローぶり。

スクワットなんかは両脚がくっついちゃうんじゃないか？っていうくらい。

そう言えば試合前にラックの高さを申請するんだけどオーストラリア協会の係の方が「15段って間違えだろ？」って半笑いしながら聞いて来たんです。

「知らないんだろ？ビックリするぞ」って心でニソニソしてたっけ。

(ちなみに歯痛で直前までうるさく言っていましたけど試合が終わればその歯痛もすっかり。途端にお元気になりよく喋りうるさくなってました)

谷川達人選手もかつての世界チャンピオン。

ただ叫ぶばかりでない本物の気合。大きな怪我や手術を乗り越え再び戴冠。

ベンチプレスにおいては藤田俊夫選手をはじめマスターズのお歴々もそのパフォーマンスで会場を大いに沸かせてくれました。

そしてオセアニアにも目を見張る輩たち。

そりゃ、強い。

しかし本当に尊敬され羨望を集めるのはただ強いだけではない、チャンピオンとして人を惹きつける立ち振る舞い。

そう「雰囲気」

その圧倒的な力は誰もが認めますが中にはあまりお行儀が宜しくない輩もいて。

日本選手のフェアプレイ、ステディな試技ぶりこそ誇るべきものだと思いますし、いろんな国の選手たちと大いに交流して欲しいものですが相手から「写真を一緒に撮らせて」と言われるようにならないと本物ではないんじゃないかな。

次のウズベキスタン…

その時にまた「雰囲気」のあるチャンピオンに出会えるかな。

そうそう「青のドーム」で有名な世界遺産・サマルカンドは本当に素晴らしかったです！

それにしてもこれだけの大きな大会でさぞ運営側は大変だったかと。

最後にそのエピソード。

思えば長いようであり短くもあり、そんな日程もいよいよあと2日となった朝。

小職がロバート・ウィルクスさんに哀愁を込めて「Only 2 Days」と言ったところ、すぐさま「More 2 Days…」と。本音が垣間見えた瞬間ですね。

「まだ2日もある…」

翌朝も掛け合いのように同じ会話。

それほど大変な大会。

それほど濃密な大会。

他にも書きたい、伝えたい事は湯水の如く。

またの機会にお目にかかりましょう！

(記録は22-8号をご覧ください。)



頑張った、オーストラリアのロバート・ウィルクス氏